

実践研究

全学インターンシップの確立に向けて

— キャリア形成を支援するインターンシップ研修システムの試行的検証 —

廣瀬 幸弘

要旨

本学における全学インターンシップは、事前研修→インターンシップ研修（40時間以上）→事後研修などから構成されている単位授与型のプログラムである。

本研究は、我々が「協定型インターンシップB」と呼んでいる、学部を限定せず実施される研修システム（事前学習セミナー、事前・事後研修）を導入した全学インターンシップにおいて、事前と事後の研修時に実施した学生アンケート結果を分析し、本インターンシップ・プログラムの影響やその効果について検証したものである。その結果、将来の職業選択の基準、社会で必要とされる能力、今後の大学生活で得たいことおよび進路選択に対する自信などのいくつかの項目で、興味深い所見を得ることができた。特に、本プログラムを履修することにより、履修前と比較して大学での専門科目への学習意欲が有意に高まり、対人ネットワーク構築への積極性や、将来の進路選択に対する指針を得ることができるようになった。以上の結果より、全学インターンシップ・プログラムにおける研修システム（事前学習セミナー、事前・事後研修）の導入は、大学での学びを検証し、学びを深める実践的教育プログラムとして有効であることが示唆されたので、今後、さらなる研修内容の改善に努力してゆきたい。

キーワード

全学インターンシップ、協定型インターンシップB、事前学習セミナー、事前研修、事後研修

1. はじめに

インターンシップは、現在、日本の多くの大学で導入され、多様なプログラムが展開されている。

近年、日本の大学でインターンシップが普及し^{1),2),3)}多くの学生が積極的に参加し始めたのは、学生側と大学側がそれぞれ抱える「社会的背景」が関連していると思われる。リーマンショック以降、米国発の急速な世界的経済環境の悪化に加えて、欧米や日本などの先進国だけでなく、アジア、南米、アフリカ等の新興国や発展途上国を巻き込んだ形で、まさに地球規模で広がるグ

ローバル社会に対応するため、企業が求める大学生の新規採用基準が、大きく様変わりしてきている。

文部科学、厚生労働両省の調査では、「今春卒業予定の大学生の就職内定率（2011年12月1日時点）は71.9%で、前年同期を3.1ポイント上回ったが、96年の調査開始以降最低だった2010年度に次いで過去2番目に悪い水準であった。文部科学省は「改善の兆しが見えてきた」とみる一方、厚生労働省は「円高や欧州の財政危機で景気の動向は不透明感を増しており、予断を許さない」と指摘している⁴⁾。

一方、日本私立学校振興・共済事業団の調査によると、2011年度、私立大学572校の入試状況は、入学者を入学定員で割った「定員充足率」が、過去最低を記録した。「定員充足率」が100%未満の、いわゆる「定員割れ」の大学は、前年度より5校増の223校で、私立大学全体の39.0%（前年度比0.7ポイント増）であった⁵⁾。

まさに、「大学全入時代」が、すでに数多くの大学において現実のものになってきているのである。このような背景を踏まえ、学生側にとっては、「就職活動の前哨戦」として、インターンシップに参加することにより、就職活動に求められる「知識やスキル」を効率的に身につけようとし、大学側は、18歳人口の減少にともない入学志願者が定員数を割り込む深刻な事態に対応するため、大学経営戦略の観点から、「就職実績を確保するための実践的教育プログラム」としてインターンシップを積極的に展開しようとしている「社会的背景」が存在する。

インターンシップは、1906年に米国のシンシナティ大学において、当時の工学部長であったヘルマン・シュナイダー（Herman Schneider）より発案され、カリキュラム化されたのが、発祥とされている⁶⁾。

就業体験による貴重な経験を通じて、職場の中で従業員といっしょに仕事をするにより、技術者としての適性を知り、企業の管理運営や労働問題を身近に垣間見るにより、仕事の意義や将来の進路について深く考える「きっかけ」を与える実践的教育プログラムとしての機能を発揮していたのである。

そこで、インターンシップが本来もつ実践的教育プログラムとしての機能を踏まえて、現在、本学が取り組んでいる全学インターンシップについて、学部を限定せず実施される研修システム（事前学習セミナー、事前・事後研修）を導入した「協定型インターンシップB」において、事前と事後の研修時に実施した学生アンケート結果を分析し、本インターンシップ・プログラムの影響やその効果について検証した。

2. インターンシップの導入と参加学生の推移

本学は、日本の大学では全国的にも比較的早い時期からインターンシップ・プログラムを先駆的に導入してきた歴史的経緯¹⁾がある。また、2003年度からは、それまでそれぞれの学部ごとに実施されてきたインターンシップの一部を全学横断的に統合した「全学インターンシップ・プログラム」としてスタートさせた。

図1は、1999年度からの本学でのインターンシップに参加した学生の推移とその変化を取り扱い部門別に示したものである。（登録人数ではなく参加人数の延べ数）

全学インターンシップの確立に向けて

2007年度には1393名がインターンシップに参加し、その後も参加学生数は常に1000名を超えており、2009年度に一度、1046名まで減少したものの、2010年度は1262名まで回復した。

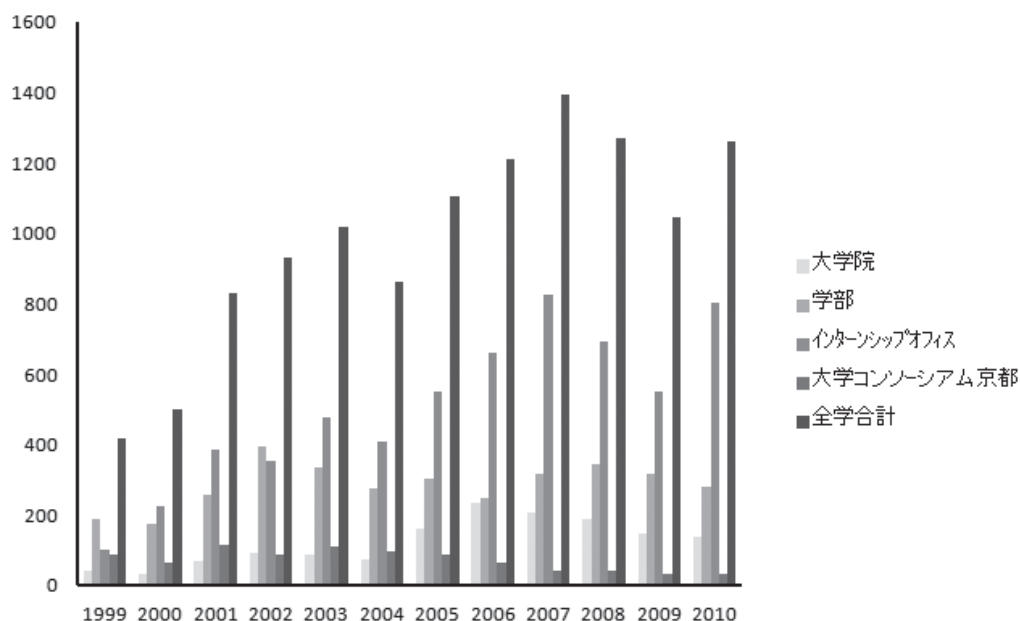


図1. インターンシップ参加者数の変化（取り扱い部門別）

3. 全学インターンシップ・プログラム

全学インターンシップは、事前研修を受講した後にインターンシップ研修（40時間以上）に参加し、その後、事後研修を受講しなければならないサンドイッチ型構成による単位授与型のプログラムで、その研修目的や内容により、3つのタイプに分類される。

①協定型インターンシップ A

各学部の教学内容と密接に関連する研修内容であるため、原則として指定された学部の所属学生に限定されるプログラムとして展開される。各学部側と受入機関との間で協定を締結し、プログラム内容・実施期間等が決められたプログラムである。したがって、ガイダンスや、事前研修・事後研修も「全学インターンシップ・プログラム」で用意される研修とは別に実施されることがある。

②協定型インターンシップ B

原則として、学部を限定せず実施されるプログラムである。大学側と受入機関との間で協定を締結し、プログラム内容・実施期間等が決められている。文理融合型の事前研修と事後研修が実施され、さらに2011年度より事前研修前に開講される「事前学習セミナー（第1回～4回）」の

参加が必修となった。

③学校インターンシップ

教職を目指す学生や広く教育分野を志望している学生を対象とし、本学が包括協定を締結している教育委員会、諸学校の協力を得て、2003年度から「全学インターンシップ・プログラム」の中に位置づけて推進しているプログラムである。

4. 「事前学習セミナー」および事前・事後研修

協定型インターンシップBでは、2011年度より、インターンシップに行く前に、「事前学習セミナー」の受講が必修となった。

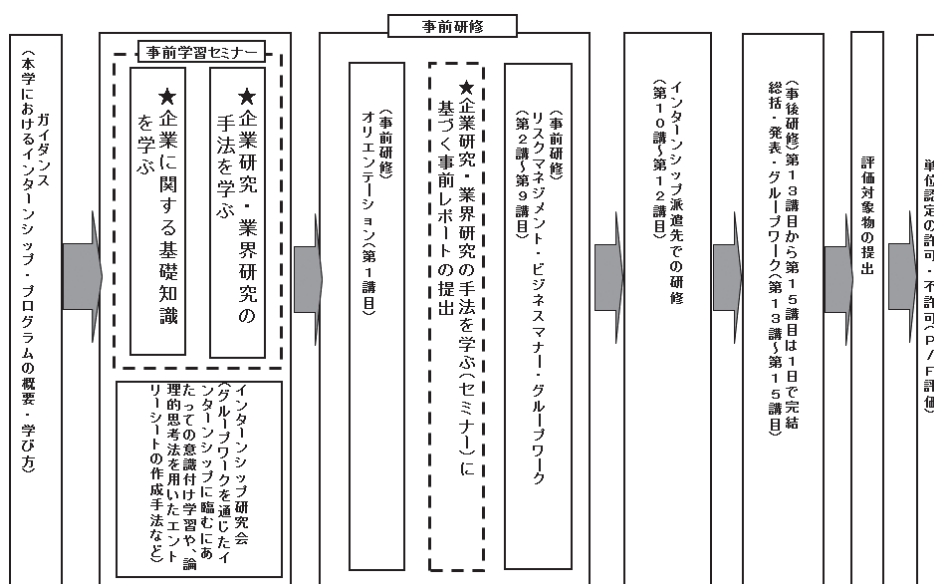


図2. 全学インターンシップ・プログラム (協定型インターンシップB)

まず、基本的な財務分析に関する知識や、IR情報を知ることにより、インターンシップによる学びや気づきをより深化させることを目指した。

このプログラムを履修する学生は、まず、「事前学習セミナー」を受講し、その後、文理融合型の事前・事後研修をはさんだ形で、インターンシップ・プログラムに参加することになる。なお、本プログラム全体の流れを示した概要図は、図2に示した通りである。

2011年度、全学部で本プログラムに合計83名が参加した。履修学生の所属する学部は、表1に示した通りであり、本学の全学部のうち映像学部、薬学部、スポーツ健康科学部を除く、10学部であった。「事前学習セミナー」、事前・事後研修は、これらの学部所属の学生を文理融合型に混成することにより、展開された。

表 1. 各学部におけるインターンシップ参加学生数

学部	参加学生数	男子	女子
法学部	10	9	1
経済学部	13	1	12
経営学部	17	10	7
産業社会学部	12	5	7
国際関係学部	5	1	4
政策科学部	5	1	4
文学部	8	1	7
理工学部	6	4	2
情報理工学部	3	3	0
映像学部	0	0	0
生命科学部	4	0	4
薬学部	0	0	0
スポーツ健康科学部	0	0	0
参加学生数計	83	35	48

5. アンケート分析結果

事前研修および事後研修時に実施したアンケートのうち、学籍番号等により本プログラムを履修した学生を同定した。その結果、インターンシップをはさんだ受講前と受講後において対応のあるデータを回収できたのは、合計 76 名であり、アンケートデータ回収率は 90%であった。これらの回収データを分析することにより、本インターンシップ・プログラムを履修した学生にどのような影響や効果⁷⁾をもたらすかについての検証をおこなった。なお、アンケートの回収データについては、2003 年度から、本学が全学横断的に統合した「全学インターンシップ・プログラム」を開始してから、毎年、アンケートの質問項目の内容や回答レベルの段階等について検討を重ねてきた。特に、質問項目に対するバイアスの問題や、各質問項目間の相関および回答に対する分散値について検証を繰り返した。

その結果、2007 年度より、「全学インターンシップ・プログラム」におけるアンケートの質問項目の内容や回答レベルの段階を統一し、毎年、ほぼ同じ評価基準でアンケートを実施できるようになった⁷⁾。

5-1 将来の職業選択基準

将来の職業選択基準のそれぞれの質問項目について「非常に = 5」、「かなり = 4」、「ある程度 = 3」、「若干 = 2」および「まったくなし = 1」の 5 段階レベルで回答させた。事前と事後における回答レベルの割合は図 3 に示した。また、それぞれの質問項目に対するレベル値を、受講前と受講後と比較して、平均値の差の検定 (対応のある t 検定) にて、統計学的に有意差 ($p < 0.05$,

P < 0.01) もしくは傾向 (p < 0.1) が認められた項目については図 4 に示した。

受講前において将来の職業選択基準として「非常に」の割合が最も高かった項目は、「仕事の内容」で、46%であった。受講後はその割合がさらに増加し 58% になった。

「組織の将来性」は、受講前が「非常に」が 41% で、受講後は 45% であり、「仕事のやりがい」は受講前が 46% であり、受講後 53% になった。「人間関係」は、受講前は「非常に」の割合が 38% であったが、受講後は 53% に増加した。

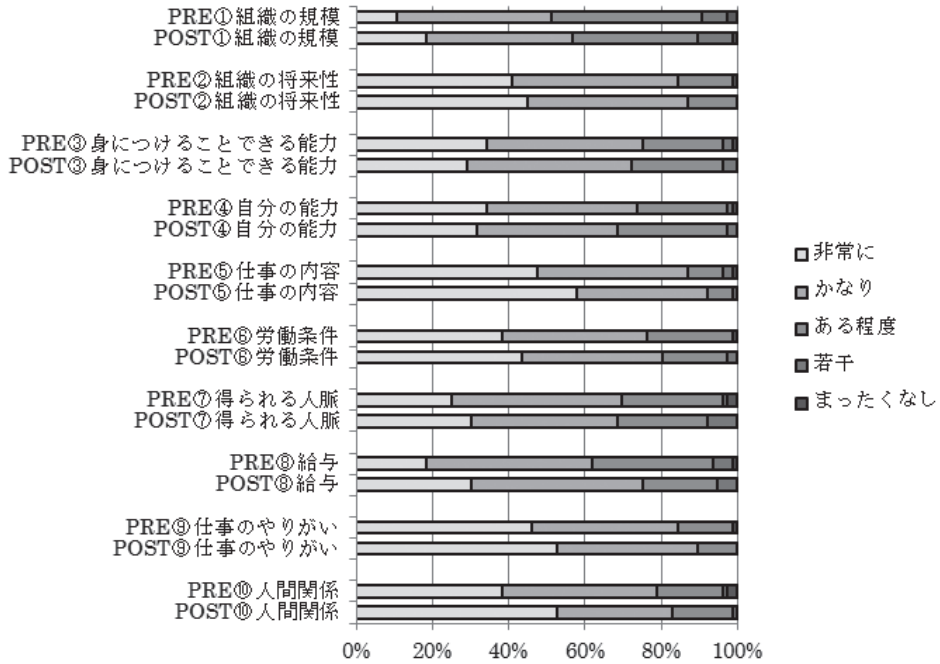


図 3. 将来の職業選択基準の割合比較

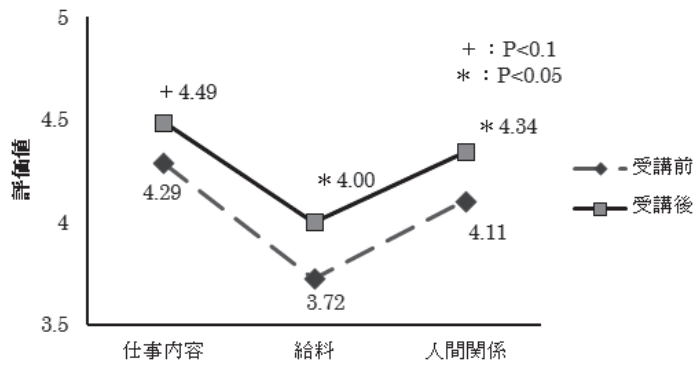


図 4. 将来の職業選択基準の意識変化

また、それぞれの質問項目に対するレベル値については、受講前と受講後と比較して「仕事内容」で増加傾向 ($P < 0.1$)、「給料」と「人間関係」で有意な増加が認められた ($p < 0.05$)。一方、「組織の将来性」や「仕事のやりがい」については、インターンシップ・プログラムの受講前・受講後ともにレベル値が高かったが、有意差は認められなかった。以上の結果より、将来の職業選択基準として、本プログラムは、「仕事内容」、「給料」および「人間関係」について意識変化をもたらすことが示唆された。

以上の結果から、インターンシップ・プログラムによる就業体験により、将来の職業選択基準において「人間関係」に対する重要度が高くなっていくことが示唆された。

5-2 社会で必要とされる能力

社会で必要とされる能力のそれぞれの質問項目について前述と同様に5段階レベルで回答させた。事前と事後における回答レベルの割合は図5に示した。また、それぞれの質問項目に対するレベル値を、受講前と受講後と比較して、平均値の差の検定(対応のあるt検定)にて、統計学的に有意差 ($p < 0.05$, $p < 0.01$) もしくは傾向 ($p < 0.1$) が認められた項目については図6に示した。

受講前において社会で必要とされる能力として、「非常に」の割合が最も高かった項目は、「コミュニケーション能力」であり、74%であった。受講後もその割合は76%で他の項目と比較して最も高かった。次に受講前における「非常に」の割合が高かったのは、「職場の人間関係への理解」であり、59%であったが、受講後はさらにその割合が72%までに上昇した。また、「問題解決能力」における「非常に」の割合は、受講前は43%であり、受講後は57%まで増加した。「柔軟な物の見方」における「非常に」の割合は、受講前が54%であり、受講後は58%であった。一方、「企画立案能力」における「非常に」の割合は24%と社会で必要とされる能力のなかでは最も低い割合であったが、受講後は30%となり、「非常に」と「かなり」を加えた割合は、受講前が66%に対して、受講後は78%まで増加した。また、社会で必要とされる能力のそれぞれの質問項目に対するレベル値については、受講前と受講後と比較して「企画立案能力」で増加傾向 ($p < 0.1$)、「職場での人間関係への理解」と「問題解決能力」で有意な増加が認められた ($p < 0.05$)。

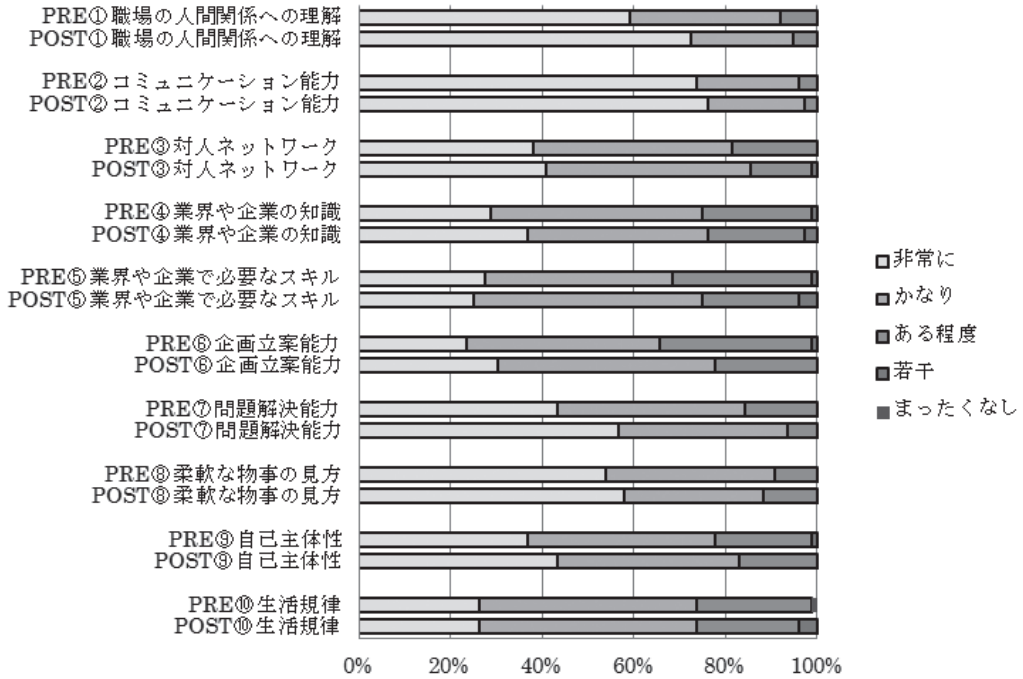


図5. 社会で必要とされる能力の割合比較

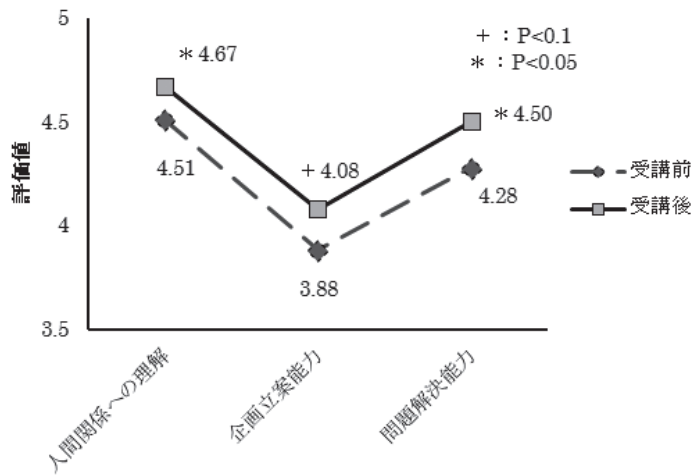


図6. 社会で必要とされる能力の意識変化

以上の結果により、社会で必要とされる能力としては、「コミュニケーション能力」が受講前、受講後ともに最も高く意識されているが、本プログラムにおいては、「職場での人間関係への理解」と「問題解決能力」に対する意識の向上が見られ「企画立案能力」にその傾向が認められた。

これらの結果により、インターンシップによる就業体験により、仕事を通じての「問題解決能力」に対する認識がより深まったと言えるかもしれない。

5-3 今後の大学生活で得たいこと

今後の大学生活で得たいことのそれぞれの質問項目について前述と同様に5段階レベルで回答させた。事前と事後における回答レベルの割合は図7に示した。また、それぞれの質問項目に対するレベル値を、受講前と受講後と比較して、平均値の差の検定（対応のあるt検定）にて、統計学的に有意差（ $p < 0.05$, $p < 0.01$ ）が認められた項目については図8に示した。

受講前において、今後の大学生活で得たいことについて「非常に」の割合が最も高かった項目は、「社会人としての心構え」であり、65%であった。しかし、受講後にはその割合が46%にまで減少した。次に受講前に「非常に」の割合が最も高かった項目は、「社会や企業の仕組み」で50%であったが、受講後にはその割合が37%に減少した。一方、「対人ネットワークを広げる」における「非常に」の割合は、受講前が31%に対して、受講後は45%になった。さらに「非常に」と「かなり」を加えた割合は、受講前が64%に対して、受講後は83%まで増加した。また、「大学生活（勉強）への意欲」における「非常に」の割合は受講前では25%と今後の大学生活で得たいことのなかでは最も低い割合であったが、受講後は45%までに上昇し、「非常に」と「かなり」を加えた割合は、受講前が54%に対して、受講後は71%に増加した。「大学生活（野外活動）」における「非常に」の割合は受講前では32%と今後の大学生活で得たいことのなかでは「大学生活（勉強）への意欲」の次に低い割合であり、「非常に」の割合は受講前では54%で「大学生活（勉強）への意欲」と同様、最も低い割合であった。しかし、受講後には非常に」の割合が42%なり、「非常に」と「かなり」を加えた割合は75%まで増加した。

「自己理解を深める」における「非常に」の割合は受講前では42%であり、受講後は55%に増加した。さらに「非常に」と「かなり」を加えた割合は、受講前が79%であったのに対し、受講後は、91%になった。

また、今後の大学生活で得たいことのそれぞれの質問項目に対するレベル値については、受講前と受講後と比較して「社会人としての心構え」と「社会や企業の仕組み」で有意な減少が見られた（ $p < 0.05$ ）。一方、「対人ネットワークを広げる」、「大学生活（勉強）への意欲」、「大学生活（野外活動）への意欲」においては、受講前と受講後と比較して、有意な増加が認められた（ $p < 0.01$ ）。また、「自己理解を深める」についても、受講前と受講後と比較して、有意な増加（ $p < 0.05$ ）が見られ、受講後における「非常に」と「かなり」を加えた割合が91%、レベル値の平均値が4.46で、今後の大学生活で得たいことのそれぞれの質問項目のなかで最も高かった。

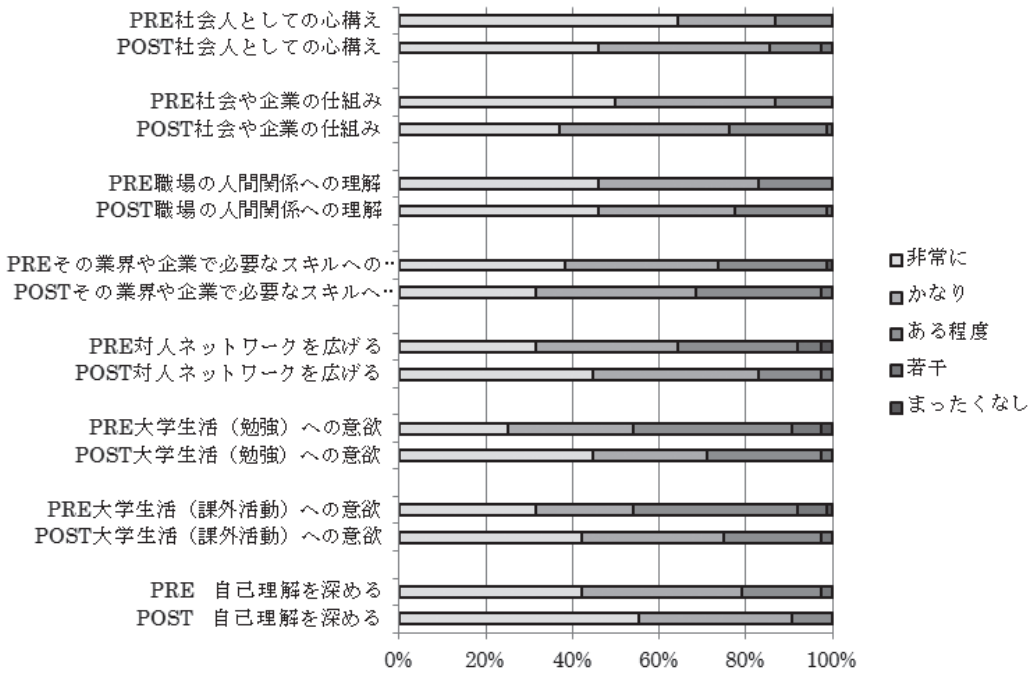


図 7. 今後の大学生生活で得たいことの割合比較

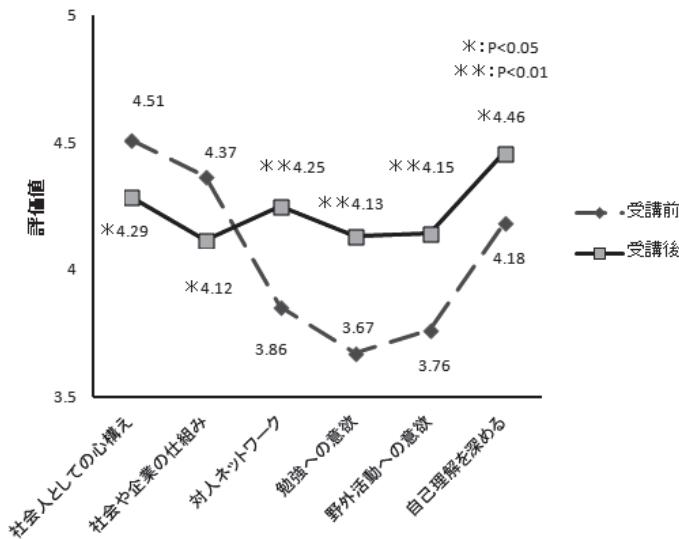


図 8. 今後の大学生生活で得たいことの意識変化

以上の結果により、本プログラムにより今後の大学生生活で得たいことについて、「社会人としての心構え」と「社会や企業の仕組み」についての意識が減少し、「対人ネットワークを広げる」、「大学生生活（勉強）への意欲」および「大学生生活（野外活動）への意欲」および「自己理解を深める」に対する意識が向上することが示唆された。

今後の大学生活で得たいことの項目のうち、「社会人としての心構え」は、受講前における「非常に」の割合が65%と最も高く、意識レベルの平均値も4.51と最高値を示していた。また、「社会や企業の仕組み」についても、「非常に」の割合が「社会人としての心構え」の次に高い50%であり、意識レベルの平均値も4.37と比較的高い値であった。しかし、受講後では、これらの項目については、ともに「非常に」の割合が低下し意識レベルの平均値が有意に減少していた。本プログラムでは、「事前学習セミナー」→「事前研修」→「インターンシップ」→「事後研修」という研修システムのなかで、インターンシップ研修先の企業や組織について、基礎的な財務分析手法などを用いて、その研修先の同業他社や同業業種を含めた「その業界・その組織における今日の課題」について事前に調査し、レポートを提出するのを義務づけていた。また、インターンシップによる就業体験を通じて、「社会人としての心構え」や「社会や企業の仕組み」について実践的な学びを得ることができたのかもしれない。

一方、「対人ネットワークを広げる」、「大学生活（勉強）への意欲」および「大学生活（野外活動）」について意識は、本プログラムを受講することにより大幅に上昇した。とくに「大学生活（勉強）への意欲」は、受講前において今後の大学生活で得たいことの項目のうち、最も意識レベルが低かったにもかかわらず、受講後には有意に上昇した。また、受講前には比較的意識レベルが低かった「大学生活（野外活動）への意欲」についてもほぼ同様の変化が認められた。また、事前・事後研修後のアンケートのコメントでも、異なる学部で構成されたチームによるグループワーク等により、大学での専門科目に対する勉強意欲や野外活動に対するさまざまな刺激や気づきを得たようであった。

このようにインターンシップが「学びのプログラム」として、大学での専門科目に対する勉強意欲や野外活動への意欲を向上させることを示唆するデータが得られたことは、非常に興味深いことであった。

さらに、本プログラムにおいて、受講前と比較して受講後に、「自己理解を深める」において意識レベルが有意に上昇し、今後の大学生活で得たいことの質問項目の中で最も高い値を示したことは、インターンシップが自己を省察し、キャリア形成プログラムとして機能するための「実践的教育装置」としての側面をもつ可能性も示唆していると思われる。

以上の結果を踏まえて、本プログラムが単なる就業体験としてだけでなく、「自律的な学びのプログラム」として、さらに効果的に機能するためには、今後、どのような工夫や仕掛けが必要なのか検討してゆきたい。

5-4 進路選択の自信

進路選択の自信のそれぞれの質問項目について、「非常に自信がある = 4」、「少しは自信がある = 3」、「あまり自信がない = 2」および「全く自信がない = 1」の4段階レベルで回答させた。事前と事後における回答レベルの割合は図9に示した。また、それぞれの質問項目に対するレベル値を、受講前と受講後と比較して、平均値の差の検定（対応のあるt検定）にて、統計学的に有意差（ $p < 0.05$, $p < 0.01$ ）が認められた項目については図10に示した。

「将来のために、在学中にやっておくべきこと」について、受講前において「非常に自信がある」と「少しは自信がある」を加えた割合は61%であり、受講後は78%に上昇した。

「自分の将来の設計にあった職業を探すこと」について、「非常に自信がある」の割合は、受講前は8%であったが、受講後は16%と2倍になり、受講前において「非常に自信がある」と「少しは自信がある」を加えた割合は54%であり、受講後は67%になった。また、「自分の趣味、能力に合うと思われる職業を選ぶこと」について、「非常に自信がある」の割合は、受講前は5%であったが、受講後は14%と約3倍になり、受講前において「非常に自信がある」と「少しは自信がある」を加えた割合は54%であり、受講後は71%に増加した。

進路選択の自信のそれぞれの質問項目のそれぞれの質問項目に対するレベル値については、受講前と受講後と比較して「将来のために、在学中にやっておくべきこと」および「自分の将来の設計にあった職業を探すこと」で有意な増加が見られ ($p < 0.05$)、さらに「自分の趣味、能力に合うと思われる職業を選ぶこと」では本プログラムにより比較的に自信をもてるようになったようである ($p < 0.01$)。

本プログラムを受講前の段階では、進路選択の自信については、すべての質問項目で「非常に自信がある」の割合が、10%未満であり、「少しは自信がある」と「あまり自信がない」の割合が比較的高く、質問項目に対するレベル値もすべての項目で低い値を示していた。これらのことから、本プログラムを受講する前は、学生自身が進路選択に対して自信が持てない状態であったことが推定される。

しかし、本プログラムを受講後、進路選択の自信に対するすべての質問において「非常に自信がある」と「少しは自信がある」の割合が上昇し、質問項目に対するレベル値もすべての項目で有意に増加した。

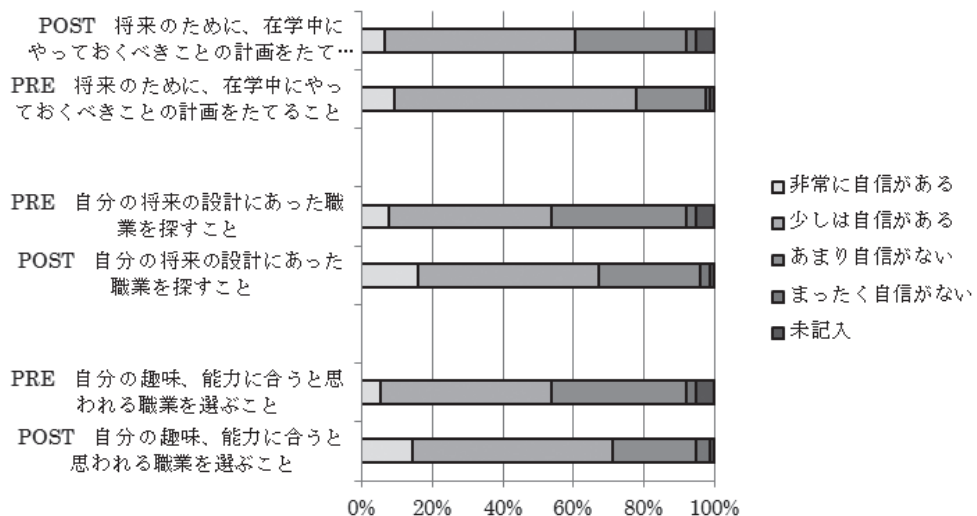


図9. 進路選択の自信の割合比較

全学インターンシップの確立に向けて

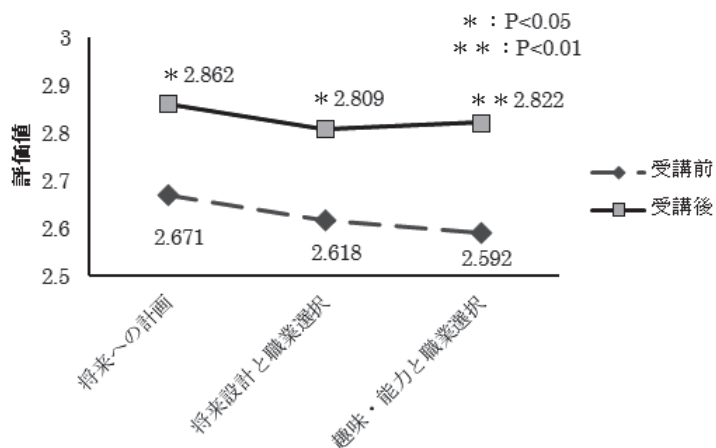


図 10. 進路選択の自信の意識変化

これらの結果から、本プログラムを受講することにより、学生自身の将来の進路や職業を選択するための指針となる「きっかけ」や「気づき」を与える機会を提供できたのかもしれない。

以上、インターンシップ・プログラムが、「自律的な学びのプログラム」であると同時に「キャリア形成支援プログラム」であることを示すデータとして、今後もさらなる検証を続けていきたいと考えている。

5-5 本プログラムにおける研修内容の満足度

本プログラムでの研修内容の満足度について、インターンシップの満足度は図 11 に、インターンシップを後輩に勧めたいかについては図 13 に、そして事前・事後研修の満足度は図 12 に示した。

インターンシップの満足度は「非常に満足」が 33%、「満足」が 61% であり、両項目を加えた満足以上が 94% であった。

インターンシップを後輩に勧めたいかについては、「とても勧めたい」が 41%、「勧めたい」が 54% であり、両項目を加えた勧めたい以上が 95% であった。

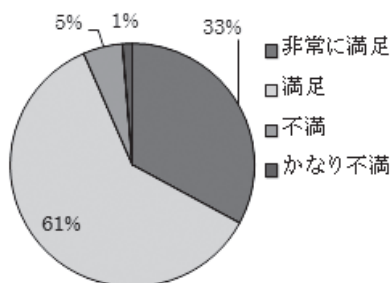


図 11. インターンシップの満足度

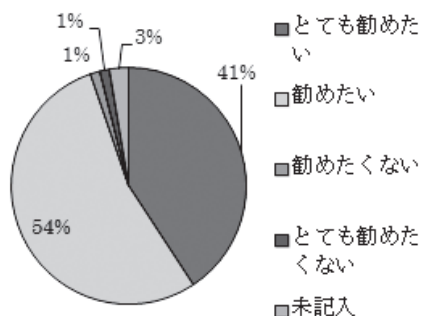


図 12. インターンシップを後輩に勧めたいか

以上の結果から、本プログラムのインターンシップ研修に参加した学生の満足度は概ね比較的高かったものと思われる。なお、この結果については、過去のアンケート結果とほぼ同様である。また、事前事後研修の満足度については、図 13 に示した通りである。事前・事後研修は第 1 講から第 15 講から構成され、その内容については、前述の表 3 に示した。

課題としては、第 2 講のリスクマネジメントの講義で、「大変満足」が 14%、「ほぼ満足」が 29% で満足度が最も低かったことが挙げられる。しかし、リスクマネジメントの講義は、コンプライアンス（企業の法令遵守）や守秘義務に対する事例学習を含め、インターンシップの事前研修として極めて重要であると位置付けているので、今後、講義のなかでグループワークを採用するなどの工夫や改善を加えてゆきたいと考えている。

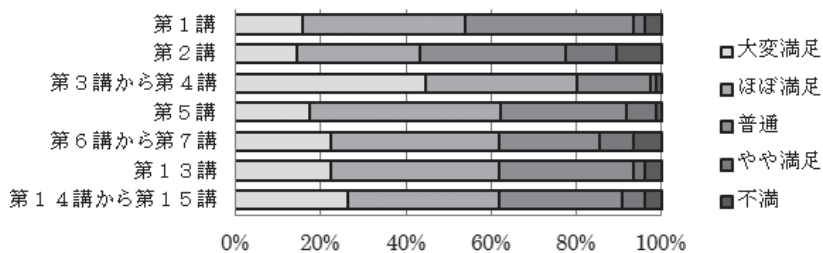


図 13. 事前・事後研修の満足度

6. 総括

近年、インターンシップは、日本の多くの大学で導入され、国内外を含め多様なプログラムが展開されている。しかし、多くの学生がインターンシップに参加し始めた「社会的背景」には、現在、急速に広がるグローバル社会に対応するため、企業が求める大学生の新規採用基準等が、大きく様変わりしていることも関連しているのかもしれない。

一方、インターンシップに学生が参加することによりどのような「気づき」や「学び」が得られるかについて詳細に検証した「実践研究」はあまり多くなく、インターンシップの「教育効果等」についてアンケート結果を詳細に分析することはきわめて意義のあることだと思われる。

本研究では、本学が取り組んでいる全学インターンシップについて、学部を限定せず実施される研修システム（事前学習セミナー、事前・事後研修）を導入した「協定型インターンシップ B」において、事前と事後の研修時に実施した学生アンケート結果を分析し、その効果について検証したものである。

その結果、本プログラムを受講することにより、将来の職業選択の基準、社会で必要とされる能力、今後の大学生活で得たいことおよび進路選択に対する自信などのいくつかの項目で、有意な差が認められた。特に、本プログラムを履修することにより、履修前と比較して大学での専門科目への学習意欲や野外活動への意欲が高まり、対人ネットワーク構築への積極性や、将来の進路選択に対する指針を得ることができるようになった。

全学インターンシップの確立に向けて

また、事前・事後研修後のアンケートのコメントでも、異なる学部で構成されたチームによるグループワーク等により、さまざまな刺激や気づきを得たようであった。

以上の結果より、全学インターンシップ・プログラムにおける研修システムの導入は、大学での学びを深め、キャリア形成を支援する実践的教育プログラムとして機能する可能性が示唆されたので、今後、さらなる研修内容の改善に努力してゆきたい。

注

- 1) 加藤敏明「立命館大学型コーオペ教育の確立に向けて—人文・社会科学系学部に普遍化可能な発展型インターンシップの実践的研究—」『立命館高等教育研究』Vol.5、2005、73-84頁。
- 2) 中山建「産学連携教育としての大学インターンシップ—動向・現状・課題」東京大学大学院教育学研究科紀要 49、2009年、183-190頁。
- 3) 吉本圭一「インターンシップ制度の多様な展開とインターンシップ研究」, 日本インターンシップ学会紀要『インターンシップ研究年報』第9号、2006、17-23頁。
- 4) 『文部科学省および厚生労働省平成23年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査』(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/05/1321137.htm、2011年4月1日)
- 5) 日本私立学校振興・共済事業団の調査、平成23(2011)年度、私立大学・短期大学等 入学志願動向 (http://www.shigaku.go.jp/files/nyuugakushigan_2011.pdf、2011年7月30日)
- 6) Ali A. Houshmand, Constaine Papadakis, One Century of Cooperative Education in United States 1906-2006, Drexel University Office of the President, 2006.
- 7) 廣瀬幸弘「2007年度全学インターンシップにおける学生アンケート分析について」立命館大学共通教育推進機構キャリア教育センター報告書(学内資料)、2008年。

参考文献

- 小方直幸「コンピテンシーは大学教育を変えるか」『高等教育研究』第4集、2001年、71-91頁
- 小杉礼子、堀有喜衣編『キャリア教育と就業支援』勁草書房、2006年。
- 高良和武監修『インターンシップとキャリア』学文社、2007年。
- 村上龍、はまのゆか編『13歳のハローワーク』幻冬舎、2003年。

Towards the Establishment of a University-wide Internship: Conducting a Trial of Internship System to Support Career Formation

HIROSE Yukihiro (Professor, Career Education Center, Institute for General Education, Ritsumeikan University)

Abstract

It is crucial to develop the effective internship program in order to foster generic skill and competence as a working member of society for supporting the formation of careers in Japanese higher education.

Internships should equip students with the practical skills necessary to resolve issues and problems in the workplace, with the aim of developing their sense of social responsibility and enabling them to become more capable individuals by strengthening their self-reliance and motivation towards improvement. The purpose of the practicum is to validate students' area of study and to improve their practical skills, and to improve their self-directed studying skills and motivation for learning.

Ritsumeikan internship is the program which is composed of pre-internship training program, internship program and post-internship training program with faculties of liberal arts, social science and science and engineering in order to foster generic skill and competence.

In this research, we analyzed the questionnaire of the students who participated in the program after post-internship training program.

In the programs, most ability element which composes the fundamental skills as a working member of society in the students has increased significantly in our statistical analysis.

Our data suggested that the students who participated in the Ritimeikan internship program improved their fundamental skills as a working member of society.

Keywords

Ritsumeikan Internship, pre-internship training program, post-internship training program, the fundamental skills as a working member of society